河北潟流域新聞

第3号

発行：NPO法人河北潟湖沼研究所　2022年3月

かほくがたのつかいかた

河北潟やその周辺の川や水路、土地はどのように使われているのでしょうか。まず河北潟の水は農業用水として使われています。河北潟は釣りやカヌー、ボート等の場として利用されています。干拓地は農地が主ですが、サイクリングやウォーキング等健康増進のための場としても利用されています。そして河北潟やその周辺の自然環境は、さまざまな動植物のすみかとなり、人にとっては自然体験や野鳥観察の場となり、癒しや学びの場ともなっています。人にとってはいろいろなメリットのある一方、使い方によっては、水質の悪化や動植物への悪影響が生じることもあります。持続可能な使い方を考えていく必要があります。

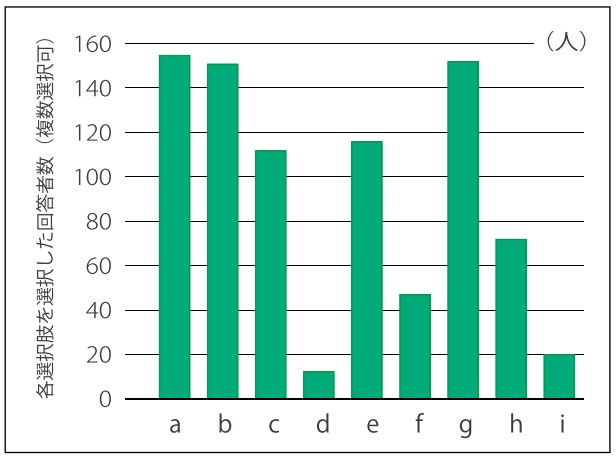
目次

2-3　河北潟との関係性・アンケート結果から
　　水辺で遊んだ思い出
4-5　江戸時代の河北潟と流域～持続可能な利用がされていた時代
　　潟を活かし活かされていた時代　中野一二三さんのジオラマ
6　河北潟流域で活動する人のお話３
　　農事組合法人まっきゃま　中村市朗さん、中村明美さん
7　河北潟流域で活動する人のお話４　サンケイブリードー　川上充紀さん
8　関係者の話し合いでつくられた河北潟の湖面利用ルール

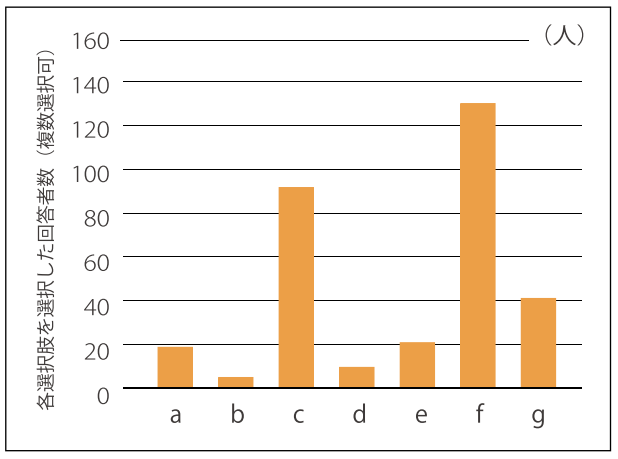
河北潟は石川県で一番大きな湖ですが、現在は流域の人にとって親しみのある場とはいいにくいようです。潟は堤防で囲まれ、近くから見られる場所が限られている事、湖岸に気軽に近づける場が少ない事、河北潟の水産物を食べる機会がなくなったこと等が原因と思われます。潟や川の水に触れる事も、今は限られた人しか経験できません。時代と共に河北潟の利用形態が変わり、人と河北潟とのつながりも希薄になっているようです。河北潟や周辺の水辺がどう使われてきたのか、利用の仕方を見てみましょう。

河北潟との関係性・アンケート結果から

二〇二〇年二月、河北潟の自然環境に関する住民アンケートを実施しました。この結果、河北潟の環境に対しては、年齢層によって意識にだいぶ違いがありました。河北潟での体験の有無や、河北潟との関係性の強さが違いに影響しているようでした。どのような違いがあるのでしょうか。河北潟流域のなかで違う世代、違う地域に住む方に、子どもの頃の水辺での体験について聞いてみました。子どもの頃の身近な環境で体験できることがだいぶ違ってくるようです。みなさんの子どもの頃と比較するといかがでしょうか？



図．過去の河北潟との関係
各選択肢）a:河北潟の魚を捕ったことがある、b:河北潟の魚を食べたことがある、c:河北潟で泳いだことがある、d:河北潟の水を飲んだことがある、e:河北潟でシジミを捕って食べたことがある、f:野鳥の卵を捕って食べたことがある、g:舟に乗って河北潟に出たことがある、h:特に関係はない、i:その他



図．現在の河北潟との関係
各選択肢）a:釣りに行く、b:ボート等で水面に出る、c:農業用水として河北潟の水を使っている、d:河北潟の魚介を食べている、e:水鳥などのバードウォッチングをする、f:特に関係はない、g:その他

河北潟との関係性

現在の河北潟との関係を問う複数選択可とした設問に対して、「特に関係はない」と答えた人が半数近くになりました。過去の河北潟との関係を問う設問では「特に関係はない」という回答は四分の一ほどに減り、現在よりも過去において河北潟との関係が深かったことが示されました。過去の経験で最も多かったものは、「河北潟の魚を捕ったことがある」で53．3％、次に「舟に乗って河北潟に出たことがある」で52．9％、「河北潟の魚を食べたことがある」51．9％、「河北潟でシジミを捕って食べたことがある」39．9％、「河北潟で泳いだことがある」38．5％、「野鳥の卵を取って食べたことがある」16．2％でした。

＊詳細な結果は河北潟総合研究二十二巻に報告させてもらいます。

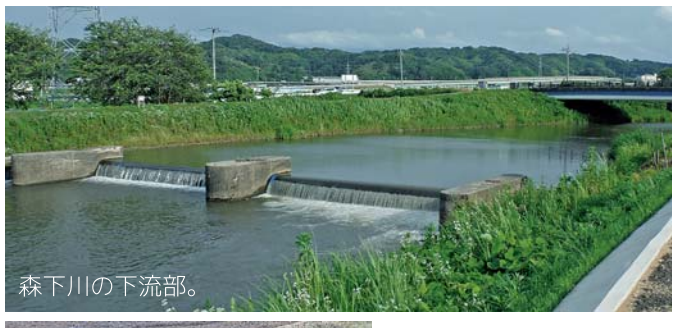
昭和60年代と令和の才田町　田んぼの水路　森下川下流

田んぼの水路で

現在の子どもたちは水辺で遊んでいるのでしょうか？小学生の子どもたちとお父さんに話を聞きました。訪ねたのは森下川下流部にある金沢市才田町、河北潟のすぐ近くです。田んぼが広がるこの町の子たちは、田んぼの水路でよく遊んでいるそうです。今まで捕まえたことがある生きものは？と聞くと、ドジョウ、カメ、スッポン、メダカ、ギンブナ、オイカワ、ハゼ、コイ、ナマズ、アマガエル、トノサマガエル…とたくさんの生きものの名前があがりました。ペットボトルで仕掛けを作って魚を捕ろうと挑戦したこともあったそうですが、残念ながらこれは一匹もとれなかったそうです。

同じ町で育ったお父さん達も、子ども時代（昭和六十年代）、同じ場所で生きものを捕って遊んでいたそうです。でも当時の水路は、コンクリートではなく土に板をあてただけのもので、遊んでいて滑って落ちることもあったそうです。同じ世代で同じ小学校でも、住んでいる場所がちょっと違うと、こういう遊びを体験したことがない人もいます。身近な環境がどんなところかで、体験できる遊びが変わってきます。

左から坂井颯流さん、越村颯さん、宮野来凰さん、坂井蓮晴さん、坂井大輔さん、前列に坂井碧咲さん



森下川の下流部。

←水路の合流地点。生きものがたくさん取れるそうです。子どもたちは教わらずとも発見するそう。

昭和20年代　柳瀬川下流部、河北潟

柳瀬川での遊び

昭和二十年頃の大場町は、柳瀬川を中心に集落が形成されていました。当時の柳瀬川は集落内で分岐し、北側に分流して、集落下流で本流と合流、河北潟に流入していました。本流には集落内で牛殺川が合流します。本流、分流とも、農業用水取水のため堰が設置されていて、集落下流域はすべて水田で、どの田んぼからでも稲を運搬する舟を通す水路が柳瀬川につながっていました。潮はきていないものの、海水の干満による水位の変化が集落内の川でもおきていました。ここで子ども時代を過ごした塩嶋保二さん（大場町）に子どもの頃の水辺で遊んだ思い出についてお聞きしました。

塩嶋さんの子供の頃、水辺での遊びは柳瀬川が原点だそうです。当時は柳瀬川の集落入り口が子供たちの遊び場で、泳ぎはここで覚えたそうです。柳瀬川での水遊びは学年が上がってくると、本流の集落内の堰の上から飛び込んで遊ぶようになったそうです。

水がきれいで川の底は砂、魚はたくさんいたそうです。遊びの延長に魚捕りがあり、網で捕るほか、手でも捕れたそうです。フナは両手を少し広げ岸の下あたりの底を撫でるように手をすぼめてくれば簡単に手でつかむことができたそうで、獲れた魚は食料になっていました。数は少ないのですが、石垣の隙間から手を入れると、モクズガニも捕れたそうです。魚釣りでフナの他、ライギョも釣っていたそうです。ライギョは体が大きいので太めの青竹を使って、餌はカエルやオタマジャクシでした。

中学生になったら、舟に乗って一人で河北潟まで釣りに行ったこともあったそうです。

2022年の柳瀬川。昔とは違う場所を流れています。

昭和30年代　森下川中流部

森下川の思い出

文・薬師谷公民館長　小原精さん

「ネムの花が咲いたぞ」それが我々小学児童が待ちに待っていた、森下川遊泳解除の合図となります。昭和三十年代前半の話です。

不動寺町と薬師町を結ぶ「北田橋」、ちょうどその下あたりの幅広の部分が遊泳区域で、目の前に堰堤があり、堰堤の上の深いところ、深いところは二メートル以上あったかと思いますがそこは上級生が泳いだり潜ったり、時には岩場の岸辺から飛び込んだりして活用していました。

堰堤の下の水溜まりの部分は比較的浅く、女の子や下級生が安全に、そして存分に楽しめるスペースでもありました。

川では堰堤を昇るゴリや川蟹をとって遊んでいました。子供にはなかなか手ごわかったのですが、フナやナマズ、ウグイやコイもいて、興味の尽きない川遊びでした。針金を焼き入れして固くし、棒にくくりつけて「ヤス」を自作し、それで魚をとったこともありました。

また、川遊びの上級生コースには「河原市用水の取水口」があり、六～七メートルの真っ暗なトンネルを潜って抜けたときには、ちょっと大人になった気分になったものです。整備されていた護岸の向かい岸には天然の岩場があり、そこからの飛び込みを教えるのも上級生の役割でした。子供たちにとっては楽しく、そして冒険心をかきたてるアドベンチャーワールドでもありました。

ところが今振り返ると、親たちは誰一人付いていませんでした。常に二十～三十人の子供たちはお昼過ぎにそれぞれ集まり、護岸で着替えをし、十分に遊び、また護岸で甲羅干しをして三々五々散っていきました。それでいて、水難事故は全く記憶にありません。

現在では考えられませんね。本当に楽しい遊びでしたが、社会のルールや、けじめ、先輩後輩とのつながり、絆など、森下川は私たちにたくさんのことを教えてくれました。

ただ印象に残っているのは、遊泳解除の日に母親が、「泳ぐ前に川に流すんだよ」と私の名前を彫り込んだナスときゅうりを渡してくれました。河童にさらわれないようにとのおまじないです。水難に合わないようにと願う親心でした。現在の様に、べったりと子供に寄り添うのも愛情でしょうが、少し離れて子供を慈しむ当時の親の在り方を考えると胸が熱くなります。

2022年の北田橋付近。右に河原市用水の取水口が見えます。

江戸時代の河北潟と流域～持続可能な利用がされていた時代～

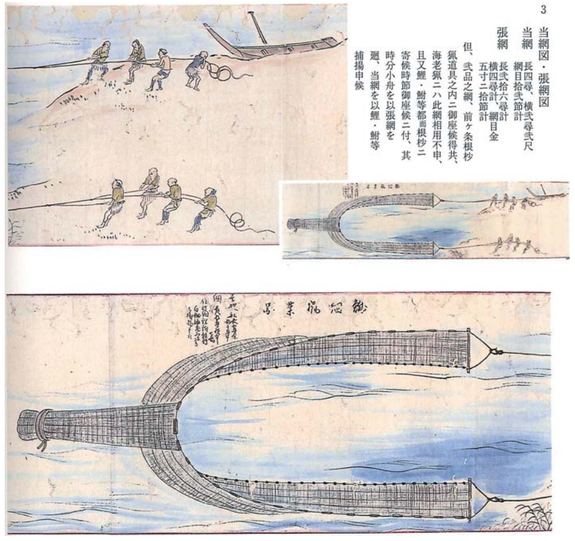
江戸時代、河北潟と周辺地域は、当時の人々によってどのように利用されていたのでしょうか。いくつかの文献からは、河北潟や流域からの自然の恵みを大切にして、時には利用の規制もしながら、持続可能な利用をすすめていたことが分かります。こうした管理は主に藩が担っていましたが、同時に住民も意見を述べており、強権力の藩体制の時代の中でも、ある程度は合意に基づく利用の調整が図られていたようです。

細かく定められていた漁法

江戸時代の河北潟漁業を記した絵図からは、河北潟では多様な漁業が営まれていたことが分かります。藩により集落ごとに細かく漁法が定められていたことによるものと思われますが、同時に集落ごとの環境の特徴や生業に占める潟漁への依存度などにより、それぞれの集落に適した漁法が選ばれていたようです。

藩による潟漁への規制や取り締まりはたいへん強かったようで、操業範囲や時期、網数、網の規格、賦課金などが細かく定められていました。一方で、集落からは漁法に対しての規制緩和を求める訴えがたびたび出されていました。不漁に対しての禁漁の措置もとられていたようです。一八五二年には、後の銭五事件にもつながるフナの大量斃死が起こり、半年間にわたり操業が停止されました。

集落間での漁をめぐる争いもあったようで、北間村より八田村が慣行を無視した漁をしているとして、藩に対して取り締まりを求める書状や、八田村と五郎嶋村との争いの記録が残っています。

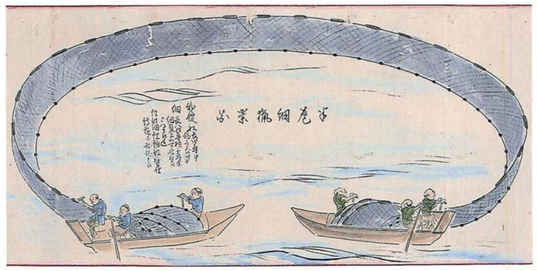


鮴網猟網図　地引網の要領で80ヒロの網を引く。獲物は末端の袋に入る。この網で鯉・鮒・鮭・鱒・白鮴（白魚）・海老・あまさぎ等をとる。（金沢市史　資料編10　近世八　58ページより）

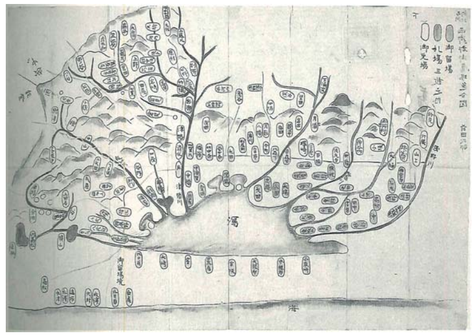
鷹場は鳥獣保護区？

江戸時代、河北潟の周辺にはたくさんの鷹場がありました。一八四四年につくられた「河北郡鷹場色分け図」には、木越、八田、才田、大場、潟端など河北潟周辺のほぼ全ての集落が鷹場として色分けされています。河北潟の周辺の管理には藩が深く関わっていたことが伺えます。鷹場とは、将軍や大名が鷹狩を目的として設定した場所です。しかし、実際には鷹狩りがおこなわれない地域まで鷹場として指定され、投網による漁が禁じられるなど、さまざまな規制・制約がありました。結果として鷹場内における資源が管理され、タカを頂点とする生態系の維持や野生生物と人との共存が成立していました。潟の水辺はタカの棲む場所として好条件のマコモなどの草原があり、これらを刈り取ることを控えるような通達がたびたび出されています。

一方で、鷹場や鷹狩りに伴う農作物被害や住民の負担の大きさから、たびたび苦情も寄せられていたようで、鷹狩りを一定期間停止するなどの措置もとられていました。また、江戸時代の人口増加により、河北潟周辺でも新田開発が進み、そのため鷹場としての草原が減少していることを示す文書も残っています。河北潟の沖に向かってヨシやマコモを移植することで農地を拡げることもされていたようです。



半巻網猟網図　巻網半分の規模で魚群をかこみ、鯉・鮒・鯰・伊勢鯉・鱒・鱸等をとる。（金沢市史　資料編10　近世八　59ページより）



河北郡鷹場色分け図
（金沢市史　資料編10　近世八　698ページより）

参考資料
金沢市史　資料編10　近世八　生産と生活　2003　金沢市史編さん委員会編　金沢市
福田千鶴　2017　近世鷹場と環境－福岡藩を事例に－　鷹・鷹場・環境研究1
大門 哲　2011　水郷のポリティクス　河北潟東北岸域における耕地整理事業の導入とその史的背景国立歴史民俗博物館研究報告　第162集

潟を活かし生かされていた時代

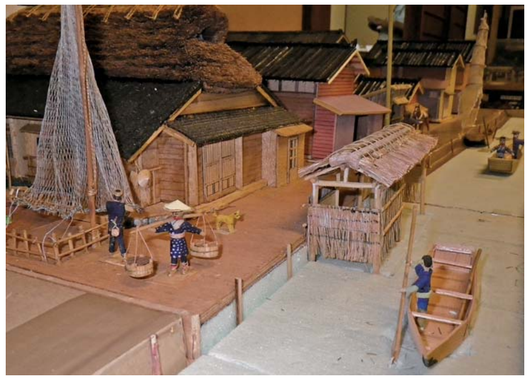
中野一二三さんのジオラマ

金沢市八田町に生まれ育った中野一二三さん（故人）が制作した八田町のジオラマには、干拓前の河北潟周辺の住民の暮らしや潟漁の様子がいきいきと再現されています。中野さんがジオラマを通じて伝えたかったことは何だったのか、特に水辺からの恵みが失われている現代において、ジオラマに示された河北潟の自然を活かし生かされてきた昭和の前半までの時代を振り返ってみることも大切でしょう。

毎年十月にこなん水辺公園で開催している「河北潟自然再生まつり」は、自然とふれ合う企画や楽しいゲームとともに、持続可能な河北潟流域を実現するための活動について紹介しているイベントです。中野さんのジオラマはここで何度も展示させていただき、人気の企画となっています。「まつり」で展示したジオラマのいくつかをご紹介します。

潟漁に向かうところ：櫂でこいで漁に出る。3人で乗ると、速い速度で舟が進んだ。右側は雨降りの時の恰好（笠、蓑）

張網（漬漁）：木材を水中に沈め寄りついた魚を狙う。張網では主にボラを捕った。



狩打ち（投網漁）：何艘もの舟で協力して魚を追い込み投網を打った。

狩持ち（四つ手網漁）：右奥の舟が、舟板を叩きながら進み、四つ手網を持って、待機する側へ魚を追い込んでいく。

河北潟流域で活動する人のお話

農業、遊び、趣味、仕事等色々な形で河北潟流域に関わる活動をしている人にお話を伺っていきます。

河北潟流域で活動する人のお話　その3

中村市朗さん、中村明美さん　まっきゃま（牧山町）の棚田、里山を守る

牧山町は金沢市東部、直江谷地区にある町です。地元の人は「まきやま」を「まっきゃま」と呼んでいます。河北潟につながる森下川の上流域にあり、金沢駅から車で三十分ほどの場所で、美しい棚田が広がっています。その風景は自然にあるものではなく、維持するためには人の手入れがかかせないものです。しかし牧山町も山間地にある他の地域と同様、高齢化、過疎化という悩みを抱えています。そのような中、町をもっとよくしたいと、様々なことに取り組まれているのが、中村市朗さん、中村明美さんご夫妻です。取り組みについてお聞きしました。

写真：農事組合法人まっきゃま

森林再生活動

牧山町は背後に山を抱えています。昔は薪を燃料にしていたため、人が山に定期的に入り木を切っていました。しかし薪が使われなくなり、人が山に入ることも少なくなり、山が荒れていきました。スギに植え替えられた所も増え、山の環境の変化から獣が下りてくることも多くなり、対策が必要になってきました。電気柵で対策する方法もありますが、それよりは棲み分けできるように環境を整えることが大事だと考えています。

牧山町では二〇一三年から二〇一八年まで「どんぐりとガラスの里まつり」というイベントを実施していました。この中でどんぐりをイベント参加者に植えてもらい、一年育てた苗を山に植える活動もしていました。これをきっかけに、森林再生活動に力を入れ始めました。最近は牧山町で、親子で森の自然体験ができる「森のようちえん」の受け入れもしています。

日常的に薪を切り出していた昔と違い、町の人だけで山の手入れをすることは難しく、今は森林保全のために木を切る活動をしている人たちの手も借りながら、山の広葉樹の再生を促しています。大規模に山の形を変えたり崩したりしないで、軽トラが通る小さな道を整備する等、小規模な活動から森林を守る、自伐型林業の可能性も模索しているところです。

まっきゃま米

今いちばん力を入れているのは特別栽培米の「まっきゃま米」です。二〇一八年に「農事組合法人まっきゃま」を立ち上げ、まっきゃま米の生産、販売をしています。肥料にこだわり、殺虫剤の空中散布等もしていません。残留農薬検査等も実施していて、残留農薬等は検出されていません。収量は普通の田に比べると少なく、斑点米や未熟な米を選別する色彩選別機にかけると、結構な量のお米がはじかれます。また棚田では、畦の草刈りがとても大変です。崖のような場所で草刈り作業をすることもあり、棚田一枚分を草刈りするのに、平場の田んぼ十枚分くらいの労力が必要です。そのような苦労がある一方で、「まっきゃま米」を楽しみにしてくれる人がいる喜びもあります。食べものがあふれている時代ですが、最近の若い人は食にこだわりがあり、子どもには良いものを食べさせたいという人も多く、牧山町にはそのような方がたくさん来てくれます。お米を買いに来るだけではなく、牧山町に来ること自体を楽しみにしている方もいて、嬉しく思います。

写真：農事組合法人まっきゃま

共存共栄できるように

「まっきゃま米」に取り組みはじめてからは、牧山町が上流にある地域であるということも意識するようになりました。上流の町で環境に配慮した取り組み、農業が広がれば、下流の環境保全にもつながります。人も生きものも共存共栄できるようにしていきたいと思っています。

昔の牧山町は、川はきれいで、田んぼでは蛍もたくさん見られました。取り組み始めたころは、すぐにでも昔のよかったところを戻せると思っていましたが、なかなか元に戻らない部分もあり、つらいと感じる時もあります。働き手が少なく困る時もありますが、町がよくなったら若い人たちが来てくれるのではないか、とも考えています。町に人が戻ってほしい、かつてのような豊かな自然を取り戻して次の世代に伝えたい、そのような思いから取り組みを続けています。

＊中村市朗さん、中村明美さんから聞き取りした内容をもとに書きまとめたものです。（番匠尚子・河北潟湖沼研究所）

農事組合法人まっきゃま
URL　https://makkyama.com/
TEL・FAX 076-257-5084
（平日10:00～16:00）
＊お米は直売、ネット販売しています。

河北潟流域で活動する人のお話　その4

川上充紀さん 牛・草・土で循環型農業　河北潟干拓地の土地を活かした事業を

河北潟干拓地には石川県内一の酪農団地があります。石川県の牛乳の約半分がここで生産されていて、河北潟干拓地というとソフトクリームを思い浮かべる方も多いようです。干拓地の真ん中、ひまわりの迷路がある「ひまわり村」のすぐ隣にあるお店「ブラウンスイス」、ここで販売されているソフトクリームは稀少な牛のブラウンスイスの生乳を使用したものです。ブラウンスイスを飼育しているのがサンケイブリードー牧場です。この牧場代表で、河北潟酪農組合代表理事組合長、河北潟干拓地で堆肥の製造販売等をしている「ゆうきの里」の代表取締役もされている川上充紀さんに、お話をうかがいました。

異業種から酪農へ

酪農を始めたのは昭和六十年です。友人と一緒に始めました。借金をして北海道で牛を八十頭買い、家畜運搬業者に河北潟干拓地まで運んでもらいました。当時の金額で牛一頭七十～八十万円ほどです。簡単な金額ではありません。でも人生は一回しかないから好きなことをやろう、と退路を断って商売を始めました。それまでは農業に携わったこともなく、金沢市の中心部、片町や竪町で洋菓子店の仕事をしていました。きらびやかな街なかから、まったく違う郊外での農業の世界に異業種参入しました。

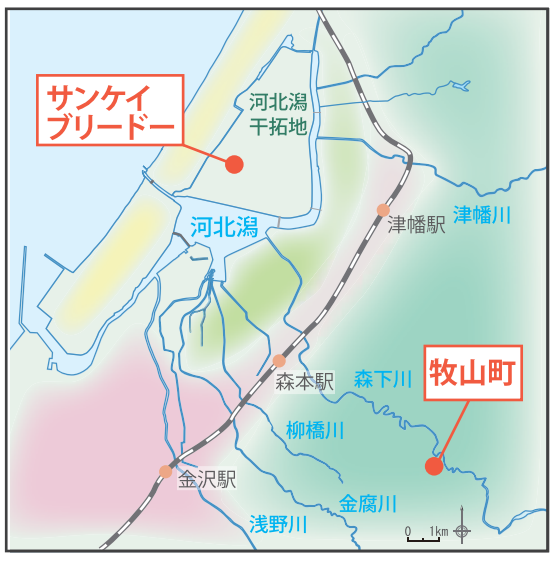
始めたばかりの頃は何もわからず、子牛が生まれそうになってもどうしていいかわかりません。獣医師や周りの酪農家の助けを借りながら、なんとか進めてきたわけです。一日に子牛が四、五頭生まれることもあり、大変でした。それから四十年近く続けてきています。

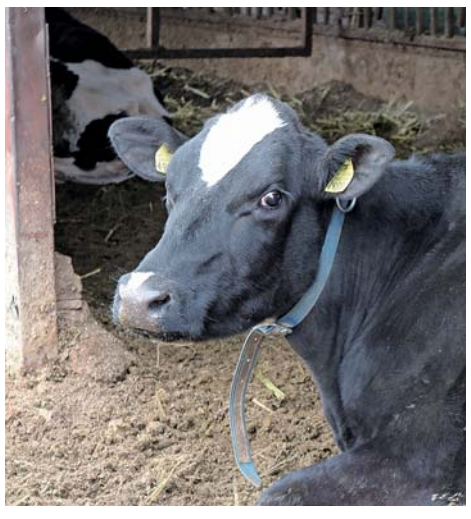
干拓地では街なかとは全く違った生活ができます。自分で絞った牛乳を飲むことができ、肉もある、堆肥も自分で作ることができる、その堆肥を使って小さな菜園で安心安全の野菜を作ることもできます。

サンケイブリードーは家族経営ではなく、従業員を雇って事業を展開しています。この経費を賄うためには単に生産量をあげるだけでは追いつきません。他と差別化した商品をつくり、付加価値をつけること、六次産業化が大事です。これで経営が成り立っています。過去には肉の産直をしていたこともありました。現在は和牛の子牛の生産にも力を入れています。

自然を相手にした農業では、自分の工夫次第で何でもきます。商品のバリエーションを考え、開発した商品が売れたら嬉しいし、作ったソフトクリームをおいしいと言われるとまた嬉しい、お客さんの喜ぶ顔を見るとほっとします。六次産業化すると人と接する機会が多くなり、そこがとても楽しいところです。また原料の生産から商品になるまで、どう作ったかをすべて知っているので、自信を持って商品を人に薦められる、これも牧場経営における六次産業化の魅力です。

酪農は総合サイエンスだと思っています。酪農をやるには何でも知っていないといけない、これで卒業という事はありません。作物のことを勉強したら、土の勉強もしなければいけない、土の勉強をしたら微生物、その次は栄養、作物を植えたら天候も知っていないといけない、耕すときには機械を動かすので機械の事も知っていないといけない、順番に勉強していくと、総合的なサイエンスになります。物事はポジティブに受け取るか、ネガティブに受け取るかで変わります。つらい、面白くないと思っていたらそうなるし、逆に思えば面白いこともいっぱいあります。





「農業資材」の活用を

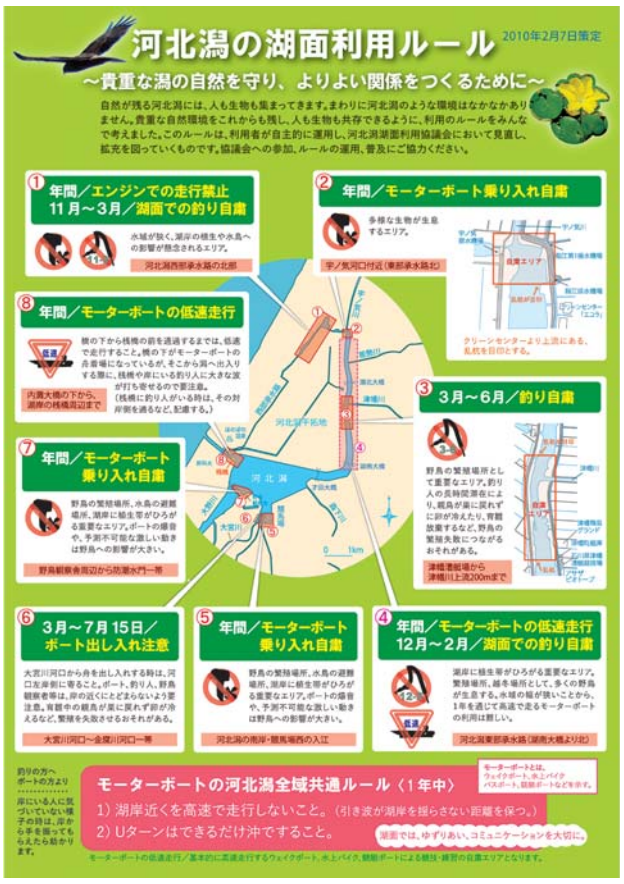
現在「ゆうきの里」の社長もしています。河北潟干拓地の牧場の糞尿は、ゆうきの里が毎日収集していますが、これは廃棄物ではなく「有益な農業資材」と考えて使っていくことが大事だと考えています。なかなか進んでいませんが、これを活用する「土づくり事業」を行政に提案したりもしています。現在も堆肥化したり、適切に処理をして排出したりしていますが、この「農業資材」は干拓地ではまだまだ開拓の余地があります。河北潟干拓地全体で付加価値、生産性をあげていきたいと考えています。

＊川上充紀さんから聞き取りした内容をもとに書きまとめたものです。（番匠尚子・河北潟湖沼研究所）

地域の自然を守るためにはみんなの合意が大切

関係者の話し合いでつくられた河北潟の湖面利用ルール

河北潟では現在、湖面の利用の仕方について、話し合いで決めたルールがあります。このルールにより、適正な湖面利用が進められ、同時に湖の自然環境が守られています。どのようにしてこうしたルールが作られたのでしょうか。



河北潟湖面利用ルールのチラシ

湖面利用者の急増

二〇〇〇年頃から河北潟では、湖面を高速で行き交うモーターボートがみられるようになりました。バス釣りやウェイクボード、ジェットスキーなどの新しいレジャーをおこなう場として、多くの人たちが河北潟を利用するようになってきました。一時期は、アマチュア競艇の練習も行われ、モーターボートを使わないカヌーやレガッタ、陸からで釣りをする人たちなどとの間でトラブルが起きかねない状況も生まれました。

利用者間でのトラブルの他に、周辺住民への騒音問題や、野鳥などの野生生物への影響も懸念されたことから、河北潟自然再生協議会は二〇〇五年よりこの問題に取り組み始めました。同協議会の構成団体にはバス釣りのグループも含まれています。最初に内部で聞き取りをおこなったところ、河北潟の湖面利用者にとっても、今後のモーターボートの利用の増加は問題であり、自分たちが環境を保全しながら河北潟を利用する上では自主規制も必要である、との認識を持っていることが示されました。既に河北潟でバス釣りをしている複数の団体の間では、湖岸に営巣するタカのチュウヒの保全のために、立ち入り禁止区域をつくっていたことから、自分たちで守るべきルールをつくり、今後の利用者間での調整を図りつつ河北潟を守る運動を拡げていったらどうか、との意見がまとまりました。

一致点はみんなが自然を守りたい

話し合いの場の設定には少し時間がかかりました。当初、県主導でこの問題解決を図ってもらおうと考え、県に相談しましたが、行政が手を出しにくい分野であるとのことで、協議会が音頭を取るのであれば話し合いの場には参加したいとの返事でした。そこで協議会より湖面を利用している各団体、個人に連絡して二〇〇九年六月二七日に金沢市こなん水辺公園において「第一回河北潟の湖面利用を考える集い」を開催しました。このときの参加者は四十八名で、内訳は、フナ陸釣り、バスボート、カヌー・手こぎボート、ウエイクボード、NPO・野鳥専門家、農家・住民、行政などでした。話し合う中で、全ての参加者が河北潟を大切に思う気持ちをもっていること、自然を守るためであれば多少は我慢しても良いと考えていることが分かりました。そこで、誰もがみんなが少しずつ我慢することで大切な河北潟の自然環境を守る、そのために湖面利用のルールをつくるという一致点ができました。その後二回の協議を経て「河北潟湖面利用ルール」ができました。

2007、2008年頃、河北潟

ルールの制定と運用

ルールについては、関係者が毎年一回集まって運用の状況の確認と必要な見直しをおこなっています。何の強制力もないルールですが、利用者自身がルールを普及するために尽力していることが強みになり、ルールの存在がよく知られるようになりました。毎回の話し合いで利用者間のコミュニケーションも良くなり、小さな調整はその場でできるようになりました。レジャーには、はやり廃りもあり、バスが釣れなくなったりウェイクボードのブームが去ったことで、現在の河北潟の湖面利用者は少し減ってきていますが、湖面利用ルールの運用は続けられています。

会議は年1回おこなわれています。

ルールに関する連絡事務局：
河北潟自然再生協議会
メール　saisei@nbs.jpn.org

河北潟流域新聞を一緒に作りませんか？

この紙面をいっしょにつくって下さる方を募集しています。河北潟流域の自然環境、環境問題、自然と人との関わり、生きもの、植物、昔の暮らし等にご興味がある方、ぜひご参加ください。特別な技術や知識等は必要ありません。活動日時等は相談して決めていきます。ご興味がございましたら、河北潟湖沼研究所までお問い合わせください。

ご感想やご意見お待ちしております

河北潟流域新聞　第3号　2022年3月発行　制作：NPO法人河北潟湖沼研究所
〒929-0342石川県河北郡津幡町字北中条ナ9-9　E-Mail：info@kahokugata.sakura.ne.jp

＊活動やイベント情報も発信しています。

河北潟湖沼研究所ホームページ　Instagram　twitter　Facebook　河北潟流域ウェブサイト

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて制作しました。